教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1981 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

毎日、沈黙のひとときを

(…)みなさんがよくご存知のように、イエズスは公生活を始める前に四十日間荒野に退いて祈りに専念されました。若いみなさん方にも、日々すこしでもよいから、沈黙の時を作り、熱心に考え、反省し、祈り、しっかりとした決定をたてるために使って欲しいと思います。昨今、「荒野での沈黙」のような雰囲気を作るのは大変むつかしくなりました。私たちは、仕事という歯車のなかに入りこんでいますし、色々なできごとがめまぐるしく起こり、マス・メディアの魅力も強く、往々にして内的な平和は邪魔され、人間にふさわしい崇高な思いにふけることも難しくなってきました。しかし、そうかと言って全く不可能になったわけでも、それが大切でなくなったわけでもありません。幼きイエズスのテレジアは子供のときしばしば姿を消し隠れて祈っていた、と自叙伝に記してあります。家族の人たちが「何について考えているのですか」とたずねると、テレジアは天真爛漫に「神さまと生命と永遠について」と答えたものです。(第四章参照)みなさんがたも特に夕方などにちょっと時間を割いて、祈ったり、黙想したり、福音書や聖人のエピソードを読んだりしてください。内的生活を深めるためにどうしても必要な「荒野での沈黙」を自分で作りだしてください。さらに出来るなら、短い黙想会や長い黙想会に参加して欲しいと思います。

イエズス・キリストは黙想の大切さだけではなく、悪を克服する努力が必要なことも教えておられます。福音書に書いてあるように、イエズスはご自分からすすんで誘惑をおうけになりました。そうすることによって、誘惑や罪とはどういうものか、また、どのように戦えばうち勝つことができるか、をしっかりと教えてくださったのです。みなさん方は少年であっても青年であっても、誘惑をうけることでしょう。キリスト信者であるというのは、どういうことでしょうか。人生のありのままの姿を認めた上で、師イエズス・キリストのお教えになった方法を使って、悪に対して戦うことなのです。困難をものともせず、勇気をだして、友であり救い主であるキリストを常に信頼してください。強い信仰をさらに強くし、恩寵の働きをさらに生き生きとさせるために、つねに警戒し、つねに祈って欲しいのです。

(一九八一・三・十八)

限りなき力と愛がひとつになると

神はすぐ近くにいてくださる

「聖なる宴にあって、キリストはパンにていまし、私たちはご受難を目の当りにする。私たちの霊魂は恩寵に充たされ、永遠が私たちに保証される。」(…)

ミサ聖祭を行なうたびに、私たちの神は遙かかなたから人間の運命、抱負、戦い、苦悩などを冷淡に眺めているような御方ではないことが思い出されます。神は子供たちを愛する父、「命を、ゆたかな命を与えるために」(ヨハネ10・10)、みことばである御子をおつかわしになるほど私たちに愛をそそいでくださる父です。

心の中にお住まいになる聖霊の働きによって(ローマ5・5参照)、いま優しく引き寄せてくださる御父、これが私たちの神なのです。

今までに何度となく、愛し合う二人が別れる場面を目にしてきました。私の若い頃、戦争中でしたが、帰還する希望もなく出発した青年たち、いつ家族と再会できるかも知らずに家から引き離された父親たちを見ました。出発にあたって愛のこもるあいさつを交わし、写真や品物などを手渡していましたが、いずれも留守中に本人を何度も思いだすのに役立てるものでした。しかし、それはそれだけのことです。人間の愛はこういうしるしを残すぐらいしかできません。

別れのとき、「イエズスはこの世から父のもとにうつる時が来たのを知り、この世にいるご自分の人々を愛し、かれらに限りなく愛をお示しになった。」(ヨハネ13・1)それは愛についての教えであり、イエズスの愛の証拠でもあったのです。こうして、この世での最後の過ぎ越し祭の前夜、イエズスは「パンを取り、感謝してのちそれをさき、『これはあなたたちのための私の体である。私の記念としてこれを行なえ』とおおせられた。食事を終えてから同じようにさかずきをとり、『このさかずきは私の血における新しい契約である。これを飲むごとに私の記念としてこれをおこなえ』とおおせられた。」(コリント前11・23〜25)

別れにあたって、真の神であり真の人であるイエズス・キリストは友に、象徴ではなく、御自身をお残しになります。御父のそばにおいでになると同時に、私たちのかたわらにとどまってくださいます。思い出になる品物をお残しになったのではなく、パンとぶどう酒の外観のもとに、ご自身が、御体、御血、ご霊魂、神性と共に実際にいてくださるのです。ある修道者が言っていました。「無限の力に無限の愛が結ばれれば、最大の奇跡以上に何が起り得ようか?」

いけにえにささげられ、のちに再び生命を取りもどされた神の小羊、私たちの中においでになる復活された御方を祝うために集う度に、キリストとの秘跡的出会いと親しい交わりの意味を生き生きと思い出さねばなりません。(聖体の奥義と礼拝に関して全世界の司教にあてた書簡、一九八〇年二月二十四日No.4

参照)(…)

キリストとの出会い

幻滅や欲求不満を味わうことはありません。「神性にみちみちたものがすべてやどる」(コロサイ2・9)キリストのペルソナにおいて、神が人間との出会いのために来てくださったのです。信仰はこれを保証しています。それゆえ、幸福を求めてやまない心の渇望を満たしたいのなら、キリストに向かわなければなりません。キリストは遠いところにいらっしゃるのではありません。地上での私たちの生活は、キリストに絶えず出会うことだと言えます。神のみことばとして聖書においでになるキリスト、師として、司祭として、牧者として聖務者の中においでになるキリスト、隣人、とりわけ教会の苦しむ体を形成している貧しい人、病人、のけ者にされた人々の中においでになるキリスト、救霊のみわざのパイプ役のような秘跡においでになるキリスト、人の心にお住まいになって神的生命を伝える静かな客人(まろうど)キリスト、このようなキリストにたえず出会うことができるのです。

キリストとの出会いはいずれも深い影響を残すものです。ニコデモとの夜の出会い、サマリアの女との偶然の出会い、痛悔した罪女のような探し求めた出会い、イエリコの門の盲人のように願って得た出会い、ザケオのような好奇心がもととなった出会い、従うために召された使徒たちとの親密な出会い、ダマスコへの途上のパウロとの電撃的出会いなど。

すべての出会いの中心になる最も親密で最も大きな影響を与える出会いは、「聖体秘義の食卓、つまり、主のパンの食卓」(ヨハネ・パウロ二世、全教会の司教に宛てた聖体の奥義と礼拝に関する書簡No.11)での出会いです。そこでは、キリストご自身が、希望を失った人を受けいれ、愛と理解で暖めてくださるのです。ご聖体は、「労苦する人、重荷を負う人は、すべて私のもとに来るがよい。私はあなたたちを休ませよう」(マテオ11・28)という甘美なみことばが実現する場なのです。現世という道を、疲労をものともせず歩み続けるのは、このキリストのことばを期待してのことなのですが、それはすでに聖体の食卓で、キリストが下さる神的なパンの中に見出されます。ご聖体においてわずかなりともそれを味わうことができるのです。

一致のしるし

同じ食卓。主がご自身を余すところなく与えるために、家庭の食事の形をおえらびになったのは偶然ではありませんでした。一同が食卓をかこむと、個人的な出会いが実現し、互いに知りあい、互いに高められる機会をもつことになります。ご聖体の宴は、このようにして、交わりと赦しと愛の生き生きとしたしるしとなるのです。

巡礼の身である私たちに必要なのはこのような友情があってこそ、人間としてほんとうに幸せを感じることができます。ところで、ご聖体はこの友情と和解をしめすだけでなく、効果的におしすすめてくれるのです。聖パウロはこの点について非常にはっきりと教えます。

「私たちは一つのパンに与るのであるからただ一つの体である。」(コリント前10・17)ご聖体は私たちとキリストを血縁関係で結ぶと共に、私たち人間同志を兄弟的に一致させてくれるのです。聖ヨハネ・クリゾストムはご聖体の効果を次のように要約しています。「私たちは一つの体を形成する。パンとは一体何であろうか。キリストの御体である。それに与る人はどうなるのだろうか。キリストの体となる。実際、パンは(…)多くの麦からできており、互いに結ばれているので、麦の一粒一粒を区別することはできない。同じように、私たちはそれぞれが互いにキリストに結ばれているのである。それぞれが異なる体から糧を得るのではなく、一つの体から糧を得るのだ。」(コリント人への書簡註釈)

ご聖体による一致は信者全員の集いを表わすしるしです。まことに意義深いしるしなのです。この神聖な食卓において、人種、社会階級の差別は消え、全員が同じ神聖な食卓に与るという事実だけが残るからです。全員が等しく与るのですから、人々を分けへだてるものをすべて取りのぞき、何の対立もない高い次元での出会いを可能にします。ご聖体はこうして「人間同志の親しさを深めるすばらしい手段」となります。誠実な心でご聖体に与りさえすればいつでも、各々の権利と義務についての互いの認識をふまえつつ、相互の関係を向上させるために新しい力を汲みとることができるでしょう。正義に基く義務の実行が容易になるのは、兄弟愛によって自己の周囲に創り出される人間関係独特の雰囲気のおかげなのです。

この点について、初代教会の信者の間であったことを思い出すのは有益です。使徒行録には次のように記されてあります。「彼らはパンをさくこと……に専念した」(使徒行録2・42)と。さらに、「かれらは自分たちの資産ともちものを売り、おのおの必要に応じてそれを分けた」(同2・44～45)とあります。初代の信者たちはこのような方法で、「この世の富が例外なくすべての人の必要を充たすために分配されるように、創造主によって定められた原則」(パウロ六世、一九七八年四旬節のメッセージ参照)を実行していました。皆で「パンをさくこと」によって養われた愛徳は、神が寛大にお与えになったよいものを共に喜び味わう態度にあらわれます。ご聖体から「兄弟的分ちあい」というキリスト信者の基本的な態度が生まれるのです。(…)

ご聖体中心の生き方

ご聖体の食卓において、キリストは私たちとの出会においでになり、パンとぶどう酒というみすぼらしい外観のもとに、私たちの希望の目標となるべき最高の善を保証してくださるのです。信仰を新たにして繰り返しましょう。「私たちはあなたの民、その民は聖であり罪人。私たちの心を新たにしてください。」

新しい心、愛によって改められた心をもった人。これこそ将来を信じて歩むためにこの国で必要とされている人です。ですから私の願い、私の希望は、キリストがこの世に持っておいでになった兄弟的精神に鼓舞されて、この国でも常に精神的、道徳的、物質的な繁栄が見られるようにということです。(…)

ご聖体のイエズス、御身の教会とこの国を祝福してください。真の平和と安定した繁栄をお与えください。アーメン。

(一九八〇・七・九　ブラジル・フォルタレサにおける聖体大会開催のミサにて)

■ご聖体は人間同志の親しさを深めるすばらしい手段となります。
■すべての出会いの中心になる最も親密で最も大きな影響を与える出会いは、「聖体秘義の食卓、つまり、主のパンの食卓」での出会いです。

説教・講話・書簡等の抄訳

家庭と家族

愛が生命を生む家庭

主よ、こころの知恵をお与えください

今日の(…)中心点は、わたくしたち一人ひとりが手に入れ、深めていくべきキリスト教的な知恵についてであります。答唱詩篇の美しい言葉「主よ、心の知恵をお与えください」について考えてみましょう。実際この知恵がなければ、生涯の設計をたて、さまざまな困難に挑戦し、しかも常に精神的な平安と内面的な静けさを心の底から感じることはとうていできないでしょう。しかしそのために必要なのは、(…)自分自身の限界を正確に知り、内側から自分を豊かにしてくれる天の恵みをつよく願う謙遜であります。現代人は、実のところ、一方で物質的な宇宙を律する法則(それは科学における観察のテーマでもありますが)のすべてを会得し理解するのはむずかしいと思いながら、他方、がんらい物質的、自然的には表わされ得ない精神の事柄については、法則を打ち立てられると思いこんでいます。「この世では何が一体どうなっているのか、わたしたちにはほとんどわからない。……しかし天国がどうなっているか、描きだした人があったろうか……もしあなたが聖なる霊を高みより送ってくれなかったとすれば。」(知恵の書9・16～17)

キリストのほんとうの弟子であること、その大切さはここで象徴的に表されています。なぜなら洗礼によってキリストは、わたくしたちの知恵となられたからです。(コリント前1・30)わたくしたちの生活を織りなしている具体的なものすべてを測る物差しはここにみつけることができます。

三つの条件

(…)福音書によれば、わたくしたちの存在の中心にイエズス・キリストがおられることがはっきりわかります。しかもそれには三つの条件がついています。いちばん執着を感じるものよりもキリストの方を上に置き、キリストのように自分の十字架をになう覚悟をし、物質的なものは相対的であることを知らなければ、わたくしたちはキリストの弟子ではありえない、つまりキリスト信者と呼ばれる資格はありません。受洗者としての自分を考えると、これは大切な点であることがわかります。簡単に触れることしかできませんが、このことについては、たえず大いに反省を重ねなければなりません。

三つの愛

福音によるこうした堅固な基盤の上にこそ、人間としてまたキリスト信者として重要なその他の価値が「接ぎ木」できるのであり、しかもいっそう大きな稔りを収穫できるのです。(みなさんの間では)家庭、仕事、聖母に対する三つの愛が、ことのほか大切にされているということを聞いています。そこで、もしお許しくださるなら、実は私もその三つの愛について思い巡らせていることをお伝えしたいのです。それぞれについて、少しずつ話してみましょう。

なによりもまず、家庭への愛。家庭こそ、人間がこの世に来て最初に出会う生命圏、そこでの経験は永久に決定的なかたちで残ります。このため、大事なことは、この世に生まれた人間に対し、気を配り、保護をかためて、その人独自の仕事、自然から、またキリストの啓示から教えられ委託された仕事を、そのひとが適切に果せるように助けることです。家庭は、愛と生命の場、というよりもむしろ愛が生命を生みだすところです。愛と生命はいずれも、ともに手をたずさえていなければ、正当なものとはならないでしょうから。ですから、キリスト教と教会は、いつもこの二つをともども守り、相互関係のなかで捉えているのです。この点について、わたくしの前任者パウロ六世教皇が一九六三年初のクリスマス放送でお話しになったことは的を得ています。「人間の倫理からもキリスト教の倫理からも不正とされねばならぬ手段によって、生命そのものの豊かさをあやうくも制限してしまうことになれば、それは罪よりも性質が悪いと考えねばなりませんが、現に時としてそうした方法に頼ろうとしてきたのです。飢えた人々の食卓にパンを増やすことは、今日の近代的な生産力の向上からすれば可能なのですけれど、そうするかわりに、誠実とは似ても似つかぬ手段で、食卓をともにする人の数を減らそうと考えている人びとがいます。こんなことは文明の名に値しないのです。」私はこの言葉に満腔の賛意を表します。それどころか、もっとつよく主張したいと思います。わたくしの目から見ると、この言葉が述べられてから今日にいたるまで、状況は悪化したと言えるからです。文明を享受して、共に生きているあらゆる階層の誠実な人々すべてが、この状況に対し、責任をもって効果的に献身する必要があると言えるからです。

仕事への愛

第二にあなたがたの仕事への愛。教会も、ご存知のように、労働と労働者の諸問題には注意ぶかい関心を払っています。わたくしは、教皇としての旅にあっても、司牧上の第一の関心事ともいうべき主要点を忘れたことはありません。さらに思い出していただきたいのは、第二バティカン公会議がどう教えたかということです。仕事は「直接に人間から出るものである。すなわち、人間は自然物に自分の刻印をしるし、それを自分の意志に従わせる。」(現代世界憲章67)社会にとって仕事が重要なものだとすれば、仕事をはかどらせるだけではなく、仕事を守り保護することが必要でしょう。そうしてこそ、労働者の権利はその義務と正しいバランスを保ち、認められ敬われるようになるのです。キリスト教的な見方に立てば絶対に、人間が個人とか社会とかの奴隷になり、生産のための単なる道具と

> ■最も執着を感じるものよりもキリストの方を上に置き、主のように十字架をになう覚悟をし、物質的なものは相対的であることを知らなければ、キリストの弟子ではありえない。

不変の教え

化していいはずがありません。人間はつねにあらゆる利益、あらゆるイデオロギーにまさるものなのです。決してその逆ではありません。

労働によって、みなさん方が、鍛練された強い徳の力を身につけられるように、公益に尽くすために常にいっそう成熟し絶えず公益をお考えになるように、ともに生きる人々をしっかりと一つに結びつける連帯感、創造者たる神に由来する連帯を生みだす人となられるよう、私は望みたいのです。

ジャーナリストへ

私は、この機会をお借りして、皆様のジャーナリストとしての日々のお仕事を支持していることを表明し、崇高な理想を持ち続けられるようお願いいたします。報道においては、センセーショナリズムを求めず、世論を支配せず、人びとの態度決定をあやつることなく、権力のための権力を求めず、むしろ、あなた方やあなた方の子供たち、さらにはすべての子ども達が、人間としての尊厳をもって生き、希望の何たるかを体験するような世界共同体の建設を目指し、一人ひとりの存在を大切にする愛と真実を求めなければなりません。

あなた方は現代社会の中ではまさに大きく計り知れない力を手中にしています。しかし、この力は民衆に属するものであることを忘れてはなりません。神から造られたすべての物と同様、この力は普遍的な目的を持ち、あらゆる人の善に役立つものです。したがって、あなた方は民衆の力の管理者であり、かれらの幸福への奉仕者です。それは実に偉大で輝やかしい任務だと言えます。しかし同時に、正しい姿勢と、絶え間ない献身、民衆に対して責任を明らかにすることが求められています。私は、あなた方が民衆の幸福のため、社会の改善のため、人類家族の一致促進のため、献身的努力を続けられますようお願いいたします。

（一九八一・二・二十五　広島）

（ジャーナリストのあなたがたに）私は聖書の次の言葉を贈りたいと思います。「遠国からのよい便りは、渇きにあえぐ者への冷や水のよう。」（箴言25・25）この神感の言葉によれば、「良い情報」は旅人にとっての、乾いた大地から吹き出して渇きをいやす泉と同じ重要さを持つのです。

容易に想像できることは、これが、あなたがたの貢献に特有の迫力、その複雑多端な成果だということです。ローマの教会と、ペトロの後継者であり普遍教会の司牧者である司教の生活と召命と証と働きを読者により良く理解させることとなれば、特にそうです。とりわけ信仰の神秘である教会の活動と現実を、あなたがたの情報機関で伝達し解説しようとする際の困難を私は理解しています。

（一九八一・二・五　カトリック新聞抜粋）

医者へ

必要なことは、医学の「人間復興」（リパーソナリゼイション）に向けての努力に乗り出すこと、患者中心の考えに立ち返りつつ、患者とのもっと人間的な関係、つまり、病める身体と情緒的領分とのきずなを引き裂かないような関係の確立を刺激するような医学を目指すことです。患者と医師の関係は聞くこと、つまり尊重と関心の念から成る対話の上に立ち戻らなければなりません。再度、自由な二者の真実な出会い、よくいわれるように「信頼」と「良心」の関係にならなければいけません。

そうすれば、患者は真実の自分を理解してもらえたと感ずるようになるでしょう。身体を使うことや諸機能の行使に障害を来しているが、人間性の深い本質を無傷で保持し、人間的のみならず宗教的地平で真実と善への権利を尊重してもらえることを期待している個人であることを。

みなさん、この考察を提起しつつ、私の思いはおのずと「わたしが病気のとき、あなた方はわたしを見舞ってくれた」（マテオ25・36）というキリストのみ言葉に向かいます。望ましい医学の「人間化」（パーソナリゼイション）への何とすばらしい刺激がキリスト教の愛から出て来ることでしょう。それは私たちに、一人ひとりの病人の姿のうちに大いなる神秘的な「患者」の崇高なお顔を発見させます。その御方は、あなたがたの賢明にして有益な専門職に頼る人々のうちで苦しみ続けておられるのです。

（一九八〇・十・二十七）

専門職の方々に一言

聖母への愛

最後に、イエズスの母に対するみなさん方の愛に触れねばなりません。とりわけ聖寵の御母を愛しておられることを私は知っています。みなさん方の美しいカテドラルでは、子としての敬愛の証拠として、聖母のお姿が掲げられ、あがめられています。わたくしの心は喜びに高まり、あなた方を励まします。聖母信心に倦まず努めてください。正しく理解し巧く生かすならば、みなさん方は必ず、唯一の救い主キリストの神秘をますます深くさとるようになるでしょう。救い主の御母のみこころはひろく優しく、ご自身の愛をも私たち一人ひとりに注いでくださるでしょう。私たちは聖母のご保護を日々、必要としていますから信頼し切って聖母にお祈りしましょう。そのためにも私はみなさん方を聖母のみ手にゆだねます。ここに参列しておられる方々も、このすばらしい集いに来られなかった人々も含めてすべての人々を、聖母の心づかいにゆだねます。とくに病気の人々、老いた人びと、子どもたち、ひとりぼっちで心細げな人々、特別な助けを必要としている人々を聖母におまかせします。聖母のみ心には私たち一人ひとりの場があり、かくて聖母のお導きのもと、わたくしたちは困難な人生に勇敢に立ちむかい、なによりもキリスト信者として完全な成熟を遂げることができるのです。（…）

（一九八〇・九・七　ベェレトリ）

司祭へ

司祭のつとめの中心は、私たちの主イエズス・キリストの福音を述べ伝えることであります。この述べ伝えは聖体祭儀によってその頂点、目的に達するものです。皆さんは教会のこの重大な使命に携わっておられるので、最近の回勅で私が強調した一つの点に、特別な注意を払っていただくようお願いします。

「教会がその生命をまともに生きるのは、創造主であり、贖い主である方の最も驚くべき属性であるあわれみを信じ、それを述べ伝える時である。」

あなた方のすべての言葉と行ないが、あわれみに富む私たちの神に証を立てるものとなるようにして下さい。皆さんの説教が、贖い主のあわれみに対する希望を呼び起こすものであるように。ゆるしの秘跡を行なうあなた方のやり方が、ひとりひとりの人に独特な方法で罪よりも強い神のあわれみ深い愛を体験させるものとなりますように。また、あなた方ひとりひとりの親切と司牧者としての愛があなた方に出会うすべての人々にとって、いつも、赦そうとしておられるあわれみ深い父を見出す助けとなりますように。（八一・二・二二）

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　072393